法華経集成の根本原理

（は仏教思想の根本真理なり）

伊藤瑞叡

一、問題の所在

法華経が集成（＝収集・制作・編成＝定期間段階集成）されるに際しては、基本となる構想があったであろう。基本となる構想には、根本となる原理があったであろう（what）。しかも根本となる原理に依拠する基本となる構想には、それによる形態・構造・機能があるであろう（so what）。

そして、その根本原理は、仏教思想の根本真理であると一般的に証認されている縁起（pratītyasamutpāda）と、如何に関係するのであろうか（why）。

以上が本論における設問（what→so what→why）であり、以下に解答を推求し、推定仮説を提示しよう。

しかも仮説推求の前提補助線となるものは、法華経の重要関心事として根本解決を企図した**舎利塔経巻廟問題**にある、と思う。

すなわち、仏陀釈尊の身には、**生滅**する生身（＝父母生身 mātā-pitṛ-ja-kāya＝隨世間身 lokânuvartaka-kāya）と**不生不滅**なる法身（＝法性生身 dharma-dhātu-ja-kāya）とがありうる。

よって滅後に（parinirvṛtasya paścime kāle paścime samaye）残れる舎利（śarīra）にも、遺骨（dhātu）なる生身（の）舎利と所説の妙法（saddharma）なる法身（dharma-kāya）（の）舎利とがありうる。すなわち身骨舎利と**法頌舎利**とがありうるのである。よって崇拝にも、ストゥーパ（＝遺骨を安置する）崇拝とチャイトヤ（＝経巻を安置する）崇拝とがありうる。すなわち供養（pūjā）にも、舎利（＝遺骨）供養と経巻（sūtra-pustaka）供養とがありうるのである。

法華経は、舎利（＝遺骨）供養→チャイトヤ（制多廟）供養＝経巻供養→経典受持（sūtrānta-dhara＝妙法の受持 dharma-dhara＝saddharma-parigraha）（における舎利供養と経巻供養と）の統一（ジンテーゼ）と、その持続性（durée）を明示する。

別言すると、それは、伽耶近成の生身の有始有終なる**生・滅**と無始無終なる法身の**不生・不滅**との**統一**なる有始無終なる久遠実成の報身（saṃbhoga-kāya）と**持続**なる**常住不滅**とを可能せしめる意趣（saṃdhā＝abhiprāya）は、縁起の理法に根拠する、と推定せしめるのである。

二、方便品・寿量品の一対相依関係

成立論における（あるいは軽率な概括でありうる）従来の一般説では、例せば、鈴木宗忠博士説に「**新層**（寿量品グループ）は法華を讃嘆し**経が仏であるとする観点より**舎利塔を排斥して**制多廟を高調**するが、これは（**経仏一如**を内容とする仏陀を中心問題とする）新層が（開三顕一を内容とする説法を中心問題とする）古層（方便品グループ）と異なることを示す」とある[1]如く、今経諸品の立場・内容等の特徴の異同により直ちに新古の層を論断して来た。しかしそれは性急であろう。

けだし経典集成上の構想の問題として解明しうるからである。

立場・内容が異なるといっても、寿量品グループの経仏一如の思想は方便品を中心とするグループを前提とするし、また寿量品にも「衆、我が滅度を見て、広く舎利（dhātu 遺形としての身）を供養し」云々とあり、分別功徳品にも舎利塔（śarīra-stūpa）を建てて舎利供養（ś.-pūjā）を説く如く、寿量品を中心とするグループは必ずしも舎利塔を排斥して制多廟を高調するとのみ断定しうるものでもない。

それどころか、二つのグループは根本思想において一貫している主局面さえある。

すなわち**方便品グループにおける正法**（Saddharma）**の三義**（dharma-netrī 教法・buddha-bodhi 証法・eka-yāna 行法）と**寿量品における大良薬色香美味皆悉具足と神力品の四句要法とは**申し合わせた如くに**一致する**。[2]

また**方便品での如来の出「現於世」**（＝生）と**寿量品での如来の入「於涅槃」**（＝滅）とが、**生滅の道理**を対応原理として**善巧方便**（upāya-kauśalya）との関係で説かれ、**随宜所説意趣**（saṃdhā-bhāṣya）として示される意義、**方便品の令「衆生入」仏知見道」と寿量品の教「化衆生」令「入」仏道」とにおいて**（すなわち**仏知見への道に入らしめる**という点で）**合一する**。[3]

よって、方便品と寿量品とはむしろ**同時の層**と見るべきであろう。

したがって全体・本質の動向を看過し部分・隅有を強調して、新古の層を性急に断定するのは、単純枚挙による帰納の誤謬に他ならないであろう。

したがって、しかしまた成立論の一般説においても、例せば鈴木博士説にあっても「原始分は**古層と新層との結合**より成立する。**法**

華経原始分は形式上重頌をなしていたのであり、他の大乗経典と同様に始めから書写されたものであり、大体始めから現在の形で存在したものであろう。すなわち古層は宝塔品にあるように明らかに妙法蓮華法門（Saddharma-puṇḍarīka dharma-paryāya）という名称で一経の形態をなして、新層は分別功徳品にあるように如来寿量法門（Tathāgat'āyuṣ-pramāṇa dharma-paryāya）という名称で古層ほどには明らかでない一経としての形態をなして存在したであろう」[4]と説くに至る。

すなわち二十一品を原始分と称するとしても、それを新古の層より成ると見るにしても、始めから書写されたもの始めから現在の形で存在したものである、とするのである。

しかも法華経が二つのダルマ・パリヤーヤ（dharma-paryāya）よりなると見ることは、事実であるから適正な指摘であろう。

筆者の研究によると、ダルマ・パリヤーヤとは広義には経（sūtra）を指示するが、狭義には序品と嘱累品の一部を除き、その主要部として長行と偈頌とよりなる法を分別（prabheda）して説示（nirdeśa）する体系を指称し、ときに dharma-mukha-parivarta（法門の品）と同視されるもので重要章品を意味することもありうるから[5]、一経の中に複数のダルマ・パリヤーヤが包含されることは、ありうることである。

したがって二つのダルマ・パリヤーヤよりなることが直ちに二経よりなることを意味しはしない。しかも新層とされる神力品にも古層の名称とされる Saddharma-puṇḍarīka nāma dharma-paryāya（妙法蓮華と名ける法門）があるから、Saddharma-puṇḍarīka（-sūtra 妙法蓮華経）が二層に共通する総名ということになろう。

したがってそれは Tathāgat'āyuṣ-pramāṇa（-nirdeśa-dharma-paryāya 如来寿量の説示の法門）に対して上位概念の関係にあるから、Tathāgat'āyuṣ-pramāṇa は Saddharma-puṇḍarīka の根本となる別相であると見ることが出来るであろう。

なお方便品ないし化城喩品の教説の説示が五百弟子授記品に saṃdhā-bhāṣita-nirdeśa という合成語で総括されている[6]。saṃdhā-bhāṣita は eka-yāna である。nirdeśa するもの、する部分は dharma-paryāya である。よって nirdeśa には dharma-p. が後続するのが、dharma-p. には nirdeśa の語が直前するのが、それぞれ相応する。

かくして筆者は次のような図式を仮定する。

Saddharma-puṇḍarīka nāma dharma-paryāya
=Mahā(-dharma=saddharma)-nirdeśa
nāma dharma-paryāya
Saṃdhā-bhāṣita(=eka-yāna)-nirdeśa-dharma-paryāya
Tathāgat' āyuṣ-pramāṇa(=saṃdhā-bhāṣya)-nirdeśa-
dharma-paryāya

なおまた鈴木博士説に「両層は内容上で（したがって宗教の本質より見ても）異なっている。すなわち(1)主役は共に仏であるが、副役が古層で声聞、新層で菩薩と相違する、(2)古層では声聞が菩薩となって成仏する（信の教に慧の教の香が残る）が、新層では衆生がそのままで成仏する（純粋に信の教である）、(3)主役の仏たる本尊が古層では応身であるが、新層では報身となる」[7]とある。

しかし、右の(1)(2)(3)の内容の対比的な異なりは、内容構想の問題でもありうるから、必ずしも新古二層の新・古を区別する論拠とはならないであろう。むしろこの対比がいかにも対比的であるところに、二層の作為的なる統一を予想せしめ一体性を推定せしめる。すなわち二つの層は一方の層を欠くならば相互に不完全となる。よって、方便品と寿量品とは一対相依関係にある、と別言しえよう。

さらにまた博士説に「両層の結合は結合の初めとしての序品と終りとしての嘱累品とによる。すなわち序品は(1)妙法蓮華教菩薩法仏所護念法門という点で教菩薩法は古層の法華法門を含み仏所護念は新層の寿量法門を含み両層の法門を総合する、(2)役者という点で初めに古層の副役の声聞を後に新層の副役の菩薩を列ねて二者を総合し終りで文殊弥勒の問応を示す、(3)経題の解釈という点で妙法蓮華教菩薩法仏所護念法門であるから古層の菩薩（妙法の蓮華で蓮華は菩薩である）と新層の仏（妙法が蓮華で蓮華は仏である）とを総合するからであり、嘱累品は(1)役者という点で古層の霊山会と新層の虚空会とを含んでそれぞれ総合する」[8]とある。

しかし、序品と嘱累品とが(1)(2)(3)などの諸点において二つの層を総合している美事さは、一古経にその序品と嘱累品とを除去して一新経の主要部分を附加して新たに序品と嘱累品とを結合したことを示すのではなく、むしろ二つの層の制作集成の同時性と二層をもって一経を構想する智巧性とを暗示する、と見る方が自然ではなかろうか。巧而且過の過にのみ拘泥してはならない。

なお教菩薩法を古層の法華法門に、仏所護念を新層の寿量品に対配するのは、一見して合理ではあるが不当である。教菩薩法と仏所護念は同格であり、新古の何れも含意する別名である、と見るべきであろうからである。

以上は二つのダルマ・パリヤーヤよりなる相依一体性を示す右の図式を傍証するものであろう。

かくして一対相依関係を表示しうる右の図式は、法華経集成の基本的構想の根本構造を明示して、構想の根本原理の何かありうることを示唆するであろう。

三、奉献塔の縁起法頌（＝法舎利＝法身偈）

塚本啓祥博士は、奉献塔と縁起法頌（＝法身偈）銘刻の流行について説述されている。要約すると、左の如し。

後世における法身観の発達と縁起法頌銘刻の流行は仏像彫刻の発生に伴って支提堂における塔の前面への仏像彫刻、次いで支提堂における塔の消滅と壁面に対する塑像の発生、さらに支提堂における仏像の安置、という建築上の変遷とも密接な関係をもっている。

次に、法華経に現われる宝塔には、法華経の仏身観が象徴的に表現されるが、その構造には、比較的低い基壇をもつ覆鉢状の塔から、筒状に延長された基壇をもち、覆鉢が基壇の中に沈む傾向を示すクシャーナ時代以降の建築上のモティーフを反映している。

サールナートの奉献塔で出土した仏陀の生涯の場面を表現する石板の裏に、縁起法頌が銘刻されている（サールナート石板銘文）。縁起法頌は三―四世紀のブラーフミー文字で記され、言語は二語の梵語形を含むパーリ語で銘刻されている。諸法（存在するもの）は因（なる縁）によって生じる、その因（なる縁）について如来は説かれた。そしてその滅もまた、偉大な沙門はこのように示した、と。これと同文を銘刻した碑銘を他に一六六例を挙げることができる。また、シャコーリ（スワート）出土石刻銘文には、これまでの縁起法頌と異なって、ああ、諸行は無常である。生滅の法よりなる。生じては滅する。それらの寂静は安楽である、と銘刻されている。これは漢訳で一般に諸行無常　是生滅法　生滅滅已　寂滅為楽と記されるのに当る。

縁起法頌の銘刻は、グプタ以前では一例にすぎないが、グプタ期以降、その数が増大している。義浄は『南海寄帰内法伝』（大正五四・二二六下）において、仏塔に身舎利（大師の身骨）と法舎利（縁起法頌）を奉安した二種を区別している。前者はいわゆる仏舎利塔であり、後者は経巻を安置した奉献塔に当る。

その縁起法頌とは、義浄によれば、諸法は縁に従って起こる、如来は是の（＝諸法の）因（なる縁→縁起）を説く。彼の法は縁に因って尽く、是れ大沙門の説なり、となる。

これによって、初期仏教において、在家信者によって崇拝された仏舎利塔の建立・供養は、その流行とともにやがて僧院内にも導入されたが、法身観の発達に伴って、法舎利塔の建立・供養も行なわれたことが推定される。

筆者は、右記の中、後世の銘刻における縁起法頌の流行が指摘された点に着目したい。ことに仏陀の生涯の場面を表現するサールナートの石板の裏に縁起法頌が銘刻されている点を注意したいのである。

その原文には ye dharmā hetuprabhavā hetū teṣāṃ hy avada[t] teṣāṃ$^{+}$ yo niroddho^{+} evaṃvādi mahāśramaṇaḥ とある。[10]

縁起法頌は原始仏典（*Vinaya, I*, pp. 40; 41）ではアッサジ比丘の唱えた詩句で、これにより舎利弗は目を開いたという。[11] 縁起法頌は縁起（＝縁生）偈ともいう。[12] 仏教の根本義である苦集滅の三諦（すなわち苦の生・滅の道理）＝法身の舎利を説くから法身（舎利）偈ともいう。[13] 縁起は甚深法（gambhīra-dharma）であり四聖

諦は**最勝説法**（sāmukhaṃsikā dhamma-desanā）であることが想起されよう。

しかも涅槃経に**仏法の大綱**として説かれる**雪山偈**（＝**諸行無常偈**）にAniccā vata saṅkhārā uppāda-vaya-dhammino,Uppajitvā nirujjhanti, tesaṃ vūpasamo sukho'ti.（*Digha-nikāya*, II, p. 157）実に諸行は無常なり、生と滅とをその本質とするものなり。生じては滅するものなり。これが寂静は安楽なり。（諸行無常　是生滅法　生滅滅已　寂滅為楽）とあるのに、意義上、照合する。[14]

なお方便品の第六十八**行道偈前半**と寿量品の第三**常住此処偈**もまた同義異偈と看做しうるから比較対照を要する。

四、縁起の法と如来の生・滅

この生・滅の道理としての縁起の法と如来の出現於世と（方便）現涅槃とが、論理の必然として、奇しくも照合する。

この点において、筆者は、左の如く思索し推考（テンケン）する。すなわち構造機能分析（Structual-Functional Analysis）をなすと、左の如くなる。

(1) **諸法**（＝苦）**は**（因なる）**縁**（によって）**生**（じ＝順観anuloma-pratyavekṣaṇa＝流転門）（因なる）**縁**（によって）**滅**（するもの＝逆観 pratiloma-p.＝還滅門）である。

原文の生・滅の因（hetū teṣāṃ）の因（hetu）は縁起を指称する、とも解釈できる。

(2) **諸法**（＝諸行）は**生・滅の法**（uppāda-vaya-dhammin＝生と滅とを本質とするもの）である。

(3) この**生滅の**（法の）**道理**は**縁起**（pratītyasamutpāda）と称される。

(4) それは偈所説の妙法（saddharma）であるから**法身**（dharma-kāya・舎利）とも称されよう。

(5) これ（＝因なる縁による生と因なる縁による滅＝生滅の法の道理＝法身）すなわち**生滅の**（法の）**道理を仏陀の生涯**に対配すると、**如来の生**＝出現（＝成覚出世 abhisaṃbuddha＝出現於世 loka utpadyate）と**如来の滅**＝入滅（＝当入涅槃＝入於涅槃 parinirvāṇa）の由縁（△目的 prayojana）は何かという設問になりうる。

(6) 法華経は、**如来の生**＝出現於世＝成覚出世**の目的は何かを方便品の主題**となして**十如**（△五何）**実相・四仏知見**を説いて、三乗の説示（tri-yāna-nirdeśa）を善巧方便（upāya-kauśalya）なりと明し、真実として**一乗**を示し、**如来の滅**＝当入涅槃＝入於涅槃**の意義は何かを寿量品の主題**となして**久成**を明して、もって伽耶近成の**生滅の如来が方便垂迹**[15]であり、（文上随他意の）久遠実成（によって示される文底随自意）の**常住不滅**

(sadā sthita aparinirvṛta) の如来が真実本地であることを解答とする。

方便現レ涅槃ヲ（＝当レ入二涅槃一 ātmanaḥ parinirvāṇaṃ vyāharati などと方便説レ法 vadāmy upāyam して涅槃地を示現する nirvāṇaṃ c'upadarśayāmi）とあるを思うべし。

(7) しかも方便・寿量の二品は共に善巧方便（upāya-kauśalya）を基軸用語（キーワード）とし、令衆生入仏知見道を唯一の合目的々作用（eka-prayojana＝一大事因縁・一誼）とし随宜所説意趣（saṃdhā-bhāṣya）を根本概念（キーコンセプト）（die Grund begriff）とする。[16] しかも如来神力品は saṃdhā-bhāṣya を釈名（nirukti 語義解釈）して、その saṃdhā を anusaṃdhi（因縁・次第・所帰）にして sūtrāṇa... bhūta artha（諸経の真実義）なりとする。[17] すなわち方便・寿量・神力の三品は必然的（にして内的な）結合関係にある。

(8) かくして（一乗を示す）方便・（一仏を明す）寿量の二品が生滅（＝gambhīra-dharma なる縁起）の道理によせて説かれ、それを対応原理として一対不可分の相依関係（生滅即常住＝を示す関係）にあることを知る。

(9) この法華経の方便・寿量の二品相依のパラダイムは、その発想の起因が「（仏陀は何故に世に出現し何故に入滅するのかに要約される）仏陀の生涯」の場面を表現する石板裏面に銘刻されるにいたった縁起法頌（＝法身舎利偈）にあると推定し、原拠が法頌における生滅の道理にある、と推求することを要請するであろう。

(10) すなわち法華経は、仏伝における釈尊の生滅の意義を（無常）縁起（＝法性）の見地から常住を示すものなり、と開顕したのである。

塚本博士説㉕(1)の「久遠実成の本仏（＝真実＝無始無終の法身＝本地）と伽耶近成の釈尊（＝方便＝有始有終の応身＝垂迹）とは、異なった二つの存在と二つの時間に対する認識の結果ではなく、同一の存在と時間に対する異なった立場からの認識であり、究極において仏陀の認識（真諦）に統合されている」と見るのは、適正かつ高度な洞察による所見である。

なお私見によれば、異なった立場とは、天・人・阿修羅を含む世間（sa-deva-mānuṣâsura loka）の所知（saṃjñeya）と、法華経会座の菩薩衆（bodhisattva-gaṇa）の所観（draṣṭavya）とであり、世間の所知対象が伽耶近成であり、菩薩衆の所観対象が久遠実成（→常住不滅）である。

かくして法華経の主題の一つは、如来の常住不滅（sadā sthita aparinirvṛta）・常住此説法（＝仏陀の常住）・我浄土不毀（＝仏土の常住）を信解し信受することのできる、浄業（śubha karman）によって柔和質直（mṛdu mārdava）となれる心（citta）を明示

することにある、と知るのである。[17]

また法華教学の教相によると、**久成の本仏**は常住不滅と示されて**常住**なる**報身**であり、報身（智）の所証（すなわち実の如く知見する三界の相）が**常住**なる**法身**であり、久成の所知・所顕はいわゆる法身すなわち素法身でも単法身でもなく、「所作の仏事未だ曾て暫くも廃せず」と示される**常住**なる**応身**をも統一して（実在する己心の釈尊）、**常住三身・無始の古仏**である**本極法身**（⇑**此土有縁深厚本有無作三身の教主釈尊⇓当位即妙本有不改の当体蓮華仏**）である、という。

かくして法華教学の究竟するところは、如来秘密神通之力（mamâdhiṣṭhāna-bal'ādhāna）と常住三身の法門（dharma-mukha）との内的関係を示す教相にある、と思われる。

五、方便寿量二品の一対相依関係と如来神力品の語義解釈

さらに多少、検考しよう。

神力品の saṃdhā-bhāṣya の釈名（saṃdhāya yaṃ bhāṣitu）の文面（saṃdhā＝anusaṃdhi＝sūtrāṇa bhūta artha を知る pra-√jñā）は、神力品に先行する諸品における saṃdhā-bhāṣya の saṃdhā の意味するところを指す。すなわち方便品の「saṃdhā-bhāṣya（随宜所説意趣）を識別（vi-√jñā）して、その一乗たる Saddharma を聞・信するなら、声聞・独覚といえども、菩薩なのであり、成仏するであろう」（声聞→菩薩→成仏）という帰結と、寿量品・分別功徳品の「saṃdhā-bhāṣya を深心もて聴聞し受持して、その意趣である不可思議（acintya）なる寿命無量（aparimit'＝āyuṣ-pramāṇa）たる Saddharma を識別し信解するなら、仏智を成就するべき福徳の功用（puṇyâbhisaṃskāra）を生ずるであろう」（善男子・善女人・菩薩→成仏）という帰結とを予想し承受していると理解して、はじめてその意味するところと理念の体系が完結しうる、と判断することのできる文脈の中に位置する。

要するに bhūta artha とは Saddharma の含意する一乗・久成（＝常住）などを指称する。[18]

方便・寿量の二品における共通項を要約すると、法華菩薩道の根本は、著相（nimitta-saṃjñā）することなく深心（adhyāśaya）をもって法門（dharma-paryāya）を聴聞（√śru）して、Saṃdhā-bhāṣya＝随宜所説（三乗・近成）・意趣（一乗・久成）を識別（vi-√jñā）して疑（kāṅkṣā）を去り、意趣（saṃdhā）である衆生を仏知見への道に入らしめる Saddharma＝一乗・久成（＝常住）を信解（śrad-√dhā, adhi-√muc）し受持（ādhāra）することにある、と知られる。[19]

今経における根本的にして不可分なる対応性が、第一類の方便品における Saddharma＝Saṃdhā-bhāṣya＝eka buddha-yāna と、

第二類の寿量品におけるSaddharma＝Saṃdhābhāṣya＝tathāga-t'āyuṣ-pramāṇa＝sadā sthita aparinirvṛta―とであり、それを底礎するものとして神力品におけるSaṃdhā-bhāṣyaの語義解釈（＝nirukti 釈名）とSaddharmaたる四句要法が看取される。[20]

六、縁起法頌と順逆二観と大悲随順観・常住不滅

ここでは縁起法頌と如来の生滅・常住不滅とを縁起の順逆二観をもって分析してみよう。

すなわち『十地経論（*Ārya-daśabhūmi-vyākhyāna*）』[21]における縁起観をもって配釈すると、如来の出現（＝生）は縁起の一切相智分別観（rnam pa thams cad yoṅs su rtog pa＝順観 anuloma-pratyavekṣaṇa＝流転門 pravṛtti-mukha）に、如来の入滅は厭離有為観（＝逆観 pratiloma-p.＝還滅門 nivṛtti-mukha）に、それぞれ相当するであろう。

そして如来の生・滅を方便（upāya）とし如来の（生・滅＝）不生不滅（＝生滅滅已）（＝一乗・一仏）＝常住不滅（sadā sthita aparinirvṛta＝寂滅為楽）を真実（＝Saddharma 妙法）と見るのは、大悲随順観（sñiṅ rje daṅ mthun par yoṅs su rtog pa＝順逆和合観？）に相当するであろう。

応身なる伽耶近成（＝出現於世）の釈尊、その本地としての報身なる久遠実成（＝方便現涅槃）の釈尊、その生・滅は即（そく）、不生・不滅（＝而実不滅度）の法身なる縁起法性である、と観察（pratyavekṣaṇa）されるのであろう。

それは、伽耶近成が世間の知るところに対して、菩薩衆（bodhi-sattva-gaṇa）の所観（draṣṭavya＝buddha-darśana）である。[22]

それは応身＝報身と一体となれる法身としての常住（不滅）は、したがって三身即一常住であり、久成の報身を正意とする。よって、単法身・素法身ではなくして、論理の帰結として、本極法身（ほんごくほっしん）ともなるであろう。

七、方便品の長行と寿量品の常住此処偈

次に法華経の要文の中、縁起の順逆二観を観点として、照合が可能となる、方便品の長行と寿量品の常住此処偈を摘出して、二品一対の可能性を傍証しよう。

方便品の長行に「⑤何故かというに、如来応供正等覚者（すなわちわれ）は如来の知見を開く者……如来の知見を示す者……如来の知見に入らしめる者……如来の知見を悟らしめる者……如来の知見への道に入らしめる者である（〔妙〕但教化菩薩。諸有所作常為一事。唯以仏之知見示悟衆生、〔正〕以無極慧而造大業。猶一空慧。以無蓋哀興出于世。如仏所行。所化利誼亦

復如レ是。而為二説法一。教二諸菩薩一現二真諦慧一。以二仏聖明一而分二別之一）（から）、諸衆生をして如来の知見を開かしめる……如来の知見を示す……如来の知見に入らしめる……如来の知見を悟らしめる……**如来の知見への道に入らしめる**……（〔妙〕欲下令二衆生開一仏知見一使レ得中清浄上故出二現於世一。欲レ示二衆生仏之知見一故出二現於世一。欲レ令二衆生悟二仏知見一故出二現於世一。**欲レ令二衆生入二仏知見道一故出二現於世一**、〔正〕以下用二衆生望二相果一応レ勧中助此類上出二現于世一。黎元望想希二求仏慧一出二現于世一。蒸庶望想如来宝慧出二現于世一。以二如来慧覚群生想一出二現于世一。示二寤民庶八正由路一使レ除二望想一出二現于世一）（という）一の作事・一の作用・大なる作事・大なる作用（という唯一の合目的々作用 eka-prayojana 一大事因縁・一誼）をもって世に出現するからである（eka-kṛtyena...eka-karaṇīyena...loka utpadyate mahā-kṛtyena mahā-karaṇīyena〔妙〕**以二一大事因縁一故出二現於世一**、〔正〕所レ興レ世嗟歎一事為二大示現一皆出二一原一、正覚所レ興悉為二一誼一）。⑥　われは実には一乗について衆生に法を説く。すなわち（一切智性を究竟とする）仏乗（について法）を（説くの）である（ekam evâham...yānam ārabhya sattvānāṃ dharmaṃ deśayāmi yad idaṃ buddha-yānaṃ/ na kiṃ-cic...dvitīyaṃ vā tṛtīyaṃ vā yānaṃ saṃvidyate/〔妙〕如来但以二一仏乗一故為二衆生一説レ法。無レ有二余乗若二若三一、〔正〕転使レ増二進唯大覚乗一。無レ有二二乗一況三乗乎）」とある。[23]

また如来寿量品の長行に「⑫　如来はかくも久遠に現等覚したのであり、無量なる寿命をもち常住であり、般涅槃することはないが、如来は般涅槃を（諸衆生を）調御するために示現する（tāvac-cirâbhisaṃbuddho 'parimit'āyuṣ-pramāṇas tathāgataḥ sadā sthitaḥ/ aparinirvṛtas tathāgataḥ parinirvāṇam ādarśayati vaineya-vaśāt/〔妙〕如レ是我成仏已来甚大久遠。寿命無量阿僧祇劫常住不レ滅、〔正〕現這得レ仏。成二平等覚一已来大久。寿命無量常住不二滅度一）。」とあり、重頌に「(2)　われは多くの菩薩を勧発して、まさに仏の智に安住せしむ。多憶那由他の衆生を多億劫にわたって、われは成熟せしむ（〔妙〕教二化　無数億衆生一　令レ入二於仏道一　爾来無量劫、〔正〕勧二助発一起　無数菩薩一　皆建二立之一　於二仏道一慧一　無数億劫　開二導衆生一　億千亥数　不可思議一）」とある。[24]

常住此処偈に「(3)　またわれは衆生を調御するために方便を説き、涅槃地を示現するが、しかしわれはその時には涅槃（＝滅度）せず、実にはいまここにおいて法を顕説する（nirvāṇa-bhūmiṃ c' upadarśayāmi vinayârtha sattvāna vadāmy upāyam/ na câpi nirvāmy ahu tasmi kāle ihâiva co dharmu prakāśayāmi//3//〔妙〕為レ度二衆生一故　方便現二涅槃一而実不二滅度一　常住レ此説レ法、〔正〕而為示二現　立二于滅度一　以二教化誼一　導二利衆生一　用二権方便一　而現二滅度一　故為二衆人一　演二斯法典一）」とあるのは注意を要する。[25][26]

方便品の標出世本懐の文に説く如来の出現於世は縁起法（＝生滅の道理）頌の「因なる縁より（＝衆生をして仏知見の道に入らしめんと欲するが故に）生ずる」という生の道理である順観に相当する。

また寿量品に説く（方便）現涅槃（＝入於涅槃）は縁起法頌の「因なる縁より（＝衆生を度せんが為の故に）滅する」という滅の道理である逆観に相当する。

しかも如来は寿命無量…常住不滅にして而実不滅度常住此説法である、と云う。常住不滅とは別言すると不生不滅ということである。

ところで諸行（すなわち諸法）は、生・滅を本質とするもの（uppāda-vaya-dhammin）であるという。この生・滅（uppāda-vaya）というのは、「生ずることなく滅することのない、いわゆる本質（dhamma＝dharma）」である、というのである。

すなわち生・滅という事実は生滅することのない真実（＝ダルマ）である、と知られる。

そのダルマは、すなわち縁起であるというのである。

八、方便品の行道偈と寿量品の長行

更に照合の可能となる方便品の行道偈と寿量品の長行とを摘出して、二品一対の可能性を傍証しよう。

方便品の行道偈[27]といわれる六八偈に「これら諸法は常に滅度せるものであり本より寂静（＝寂滅）である（〔妙〕諸法従本来常自寂滅相、〔正〕常解滅度合一切法皆至寂然）」と、われは説く（ca bhāṣāmy ahu nitya-nirvṛtā ādi-praśāntā imi sarva-dharmāḥ, ṅas ni chos rnams ḥdi dag kun//gdoṅ nas rab shi myа ṅan rtag ḥdas bśad）」とある。これは方便の根柢にある仏陀の正覚の真実性を示す。それ故に証法たるdharma-svabhāva-mudrāの説（示証）明ともなっている。そして仏陀のこの証法を根柢とし「仏子は行を成じて（caryāṃ...pūriya buddha-putro, ～spyod pa kun rdsogs nas〔妙〕仏子行道已）」この証法を得るから、「来世に作仏することを得ん（anāgate'dhvāni jino bhaviṣyati, phyi maḥi dus kyi rtshe la rgyal bar ḥgyur〔妙〕来世得作仏、〔正〕当来之世得成最勝）」ということになる。

また一〇一・一〇二・一〇三偈[28]に左の如くある。

(101) かれらは多千億の法門を未来世に顕説するだろう。この一乗を示しつつ如来性において法を説く。

dharmā-mukhā koṭi-sahasr'aneke, prakāśayiṣyanti anāgate 'dhve |
upadarśayanto imam eka-yānaṃ, vakṣyanti dharmaṃ hi tathāgatatve ‖ 101 ‖

chos sgo bye ba stoṅ phrag du ma dag // ma ḥoṅs dus na rab tu ston ḥgyur te //

theg pa gcig po ḥdi ni mṅon ston ciṅ // de bshin gśegs pa ñid du chos ston ḥgyur //

未来世諸仏　雖レ説二百千億　無数諸法門一　其実為二一乗一……仏種従レ縁起　是故説二一乗一

無量法門　億千垓数　当来最勝　之所講説　諸如来尊　当宣布法　是則得見　諸仏正教

(102) この法眼は常に安住（＝存続）し諸法の本性は常に明浄である（ととを）、諸の仏・両足尊は知って、この一乗を顕説するであろう。

sthitikā hi eṣā sada dharma-netri, prakṛtiś ca dharmāṇa sadā prabhāsvarā |

viditva buddha dvi-padānam uttamā, prakāśayiṣyant' imam eka-yānam || 102 ||

chos kyi tshul ḥdi rtag tu gnas pa daṅ || chos kyi raṅ bshin rtag tu ḥod gsal bar ||

rkaṅ gñis dam pa saṅs rgyas rnams mkhyen nas || da yi theg pa gcig ces ston par ḥgyur ||

諸仏両足尊　知二法常無性一……

諸法（△仏）本浄　常行自然　此諸誼者　仏所開化　如両足尊　乃分別道　故暢斯教　一乗之誼

(103) この世間にあって常住にして不動なる法住（＝常住なる法の必然的安住性）・法位（＝不動なる法の必然的決定性）を、（すなわちこの）菩提を地上の道場において正覚せるものたちは、善巧方便を顕説するだろう。

dharma-sthitiṃ dharma-niyāmatāṃ ca, nitya-sthitāṃ loki imāṃ akampyāṃ |

buddhāś ca bodhiṃ pṛthivīya maṇḍe, prakāśayiṣyanti upāya-kauśalam || 103 ||

chos kyi gnas ñid skyon med chos ñid ni || ḥjig rten ḥdi na rtag tu mi gyo nas ||

sa yi sñiṅ por byaṅ chub saṅs rgyas te || thabs la mkhas pa śin tu ston par ḥgyur ||

是法住二法位一　世間相常住　於二道場一知已　導師方便説

諸法定意　志懐律防　常処于世　演斯讃頌　毎同讃説　善権方便　諸最勝尊　志意弘大

なお如来の説くところ諸法従本来常自寂滅相は、如来の三界を如実に現見する（dṛṣṭaṃ hi tathāgatena traidhātukaṃ yathā-bhūtaṃ）ととろとして、寿量品に詳細に「如来は三界を、生ぜず死せず、退せず出でず、輪廻せず滅度せず、真実ならず非真実（＝虚妄）ならず、有（＝実在）ならず無（＝虚無）ならず、如にあら

ず異にあらず、虚偽にあらず非虚偽（＝真実）にあらず、と如実に現見する。如来は諸の愚人凡夫が見る如くには三界を現見することはないからである。如来はこの事について現証するという本質的属性を具え忘失しないという本質的属性を具える。そこで如来が説くところの語はすべて諦であり、虚妄なるものでなく、異偽なるものでない。しかしながら種々の行、種々の欲、想・妄分別ある行を有する諸衆生に、善根を生ぜしめるために、諸種の法門を諸種の所縁をもって説くのである。……まさしく如来は如来によって作されるべきことをなすのである。（〔妙〕如来。如レ実知二見三界之相一。無レ有二生死若退若出一。亦無二在世及滅度者一。非レ実非レ虚非レ如非レ異。不レ如三三界見二於三界一。如レ斯之事。如来明見無レ有二錯謬一。以三諸衆生有二種種性種種欲種種行種種憶想分別一故。欲レ令レ生二諸善根一。以二若干因縁譬喩言辞一種種説レ法。所作仏事未二曾暫廃一、〔正〕如来皆見二一切三界一。随二其化現一亦無二所行一。亦復不レ生亦不二周旋一。亦不二滅度一不レ実不レ有。亦不二本無一不レ知不レ爾。亦無二虚実一亦不二三界如来所レ行一不レ見二三処一。如来普観二一切諸法一。在レ於二某処一不レ失二諸法一。一切所説至レ誠不レ虚。衆生苦悩不レ可二称限一。行若干種志性各異。思想諸念各各差別。欲レ令二衆生殖二衆徳本一。故為分別説二若干法一。又如来所二当作一皆悉作レ之[29]。」と説示されている。

世間所知の三界は生・死あり退・出ありの生滅の相である。しかし如来の如実知見の所観は、生・死なく退・出なくして不生不滅の相である、というのである。

この中、三界（之相）は行道偈の諸法に照合して順観に相当する。無有生死若退若出…非実非虚非如非異は行道偈の従本来常自寂滅相に照合して逆観に相当する。

かくして、如実知見された諸法従本来常自寂滅相は大悲随順観（＝順逆和合観？）に、仏子行道已来世得作仏は厭離有為観（＝逆観還滅門）に、それぞれ相当する。

仏種従レ縁起は仏子行レ道已来世得二作仏一の根拠を示し、法常無性（＝諸法本浄）、法住法位世間相常住は諸法従本来常自寂滅相の意義を明す、と看做しうる。

以上は二品一対の可能性を傍証するものであろう。

九、『生死一大事血脈鈔』等に見る生滅即常住（＝不生不滅）の論理

ところで日蓮聖人の著とされる『生死一大事血脈鈔』には生滅即常住（＝生滅の道理＝縁起＝法性）に照合する論理が明示されている。左の如し。

御状委細令二披見一候畢。夫生死一大事血脈者、所謂妙法蓮華経是也。其故は釈迦多寶二佛寶塔の中にして譲二上行菩薩一給、此妙法蓮華經の五字過去遠遠劫より已來寸時も不レ離血脈也。妙は死、法は生也。此生死の二法十界當體也。又此云二當體蓮

華也。天台云、當知依正因果悉是蓮華之法云云。此釋に依正と云は生死也。生死有之因果又蓮華法事明けし。傳教大師云、生死二法一心妙用　有無二道本覺眞徳文。天地・陰陽・日月・五星・地獄乃至佛果、生死二法に非ずと云ことなし。如是生死も唯妙法蓮華經の生死也。天台止觀云、起是法性起滅是法性滅云云。釋迦多寶二佛も生死の二法也。然者久遠實成の釋尊と皆成佛道の法華経と我等衆生との三全無差別解て、妙法蓮華經と唱奉る處を、生死一大事の血脈とは云也。此事但日蓮が弟子檀那等の肝要也。法華經を持とは是也。所詮臨終只今にありと解て、信心を致して南無妙法蓮華經と唱る人を、是人命終爲千佛授手令不恐怖不墮惡趣と説れて候。悦　哉非一佛二佛非百佛二百佛千佛來迎し取手給はん事、歡喜の感涙難押とある。(39)

すなわち右の文中、「生死（の二法）」即「十界の当体（＝当体蓮華）」、「生死（の二法）即一心（の妙用）」、「有無の二道」即「本覚の真徳」、「生死」即「妙法蓮華経（の生死）」、「起滅」即「法性（の起滅）」、「生死（の二法）」即「釈迦多宝の二仏」は、いずれも「生滅」即「常住」、「生滅の道理」即「縁起の法（＝法性）」の論理に照合し類通する。

また久遠実成の釈尊は逆観（＝厭離有為観）に、我等衆生は順観（＝一切相智分別観）に、皆成仏道の法華経は順逆和合観（＝大悲随順観）に、それぞれ照合し類通する。これらは分析判断（analytic judgment）である。

しからば、「三ツ全く、差別無シト解て、妙法蓮華経と唱へ奉る処を生死一大事の血脈とは云フ也」とは、総合判断（synthetic judgment）であり、その実践哲学（praktische Philosophie）として意味するところは甚深なるもの（gambhīra）がある、と云えよう。

すなわち、あるものが現に存在しているということ（existence）は、そのものの概念（essence）を分析しても出てこない。理論理性（reine Vernunft）による分析判断である、本仏の概念からは、本仏の存在は引き出せないのである。よって、カントの云う実践理性（praktische Vernunft）の要請（postulate）として、本仏への信解（śraddhā→adhimukti）が成り立つ、総合判断としての道徳論的証明を必然とする。

よって、生死一大事血脈とは、まさしく実践理性としての道徳的意志にとって本仏は存在しなければならないとする、理性宗教の道徳宗教への転化を含意する実践哲学の樹立を意味するであろう。

なお日蓮聖人講説にして日興上人筆録とされる『御義口伝』に左の如くある。これも生滅即常住を明示している。

（化城喩品）御義口傳云、妙法化城ナレバ十界同時無常也。蓮華化城ナレバ十界三千開落也。常住無常俱妙法蓮華經全體

也。化城寶所生死本有也。生死本有體者南無妙法蓮華經也。

釋云　起是法性起　滅是法性滅奏。[31]

（壽　量　品）御義口傳云　壽量品者十界衆生本命也。此品本門云事　本入門云事也。凡夫血肉色心本有談　故本門云也。此重不至始覺云　迹門云也。是悟本覺云　本門云也。所謂南無妙法蓮華經　一切衆生本有在所也。爰以經我實成佛已來云也云云。

（分　別　品）御義口傳云　此品上品時聞本地無作三身如來壽故　今品上無作三身信解也。其功德分別也。功德者十界已已當體三毒煩惱　此品時其儘妙法功德也分別也。其功德者　本有南無妙法蓮華經是也云云。[32]

しかし生滅即常住に関する理解は一重、深長している。

すなわち生滅即法性＝起滅即法性を基本として、生滅＝起滅＝生死＝無常となし、常住＝本有となし、常住（＝本有）・無常（＝生死）＝妙法蓮華経の全体、生死（＝無常）・本有（＝常住）の体＝南無妙法蓮華経と理解している。

また優陀那院日輝著『妙宗本尊略弁』巻の下に「寿量品に云く、衆見我滅度広供養舎利、一心欲見仏不自惜身命、時我及衆僧俱出霊鷲山云云。文に不自惜身命とは生死苦命の見著を捨離せしむるなり。蓋し寿量の長行偈頌、みな生滅の仏に即して不生不滅常住の仏体を見せしむるにあり」[33]とあるのも着目される。簡潔に生滅即常住を明示したものである。これは要結となる。

なお生滅無常と妙法当体（＝不生不滅常住の仏体）との即時即処の俱体俱用の論理をもってする実践哲学（praktische Philosophie）的な理論解明は、すなわち常住なる本極法身の、現存的存在者にとって究極的には一体如何なるものであるかについて、一妙日導著『祖書綱要』に見るべき高逸なる論述があるが[34]、これは本論とは、又、別問題となるので、論及はしない。

十、縁起法頌類通対照図式

以上に究明した法華経の経文・行道偈・常住此処偈と縁起法頌・霊山無常偈等を分解して類通点を対照し図式化すると、左の如くである。

能説＼所説	das Seiende（存在者）	一切相智分別観	厭離有為観		大悲随順観	das Sein（存在）→ der Seinssinn（存在意味）
縁起法頌＝法身偈	ye dharmā hetu-prabhavā hetū teṣāṃ avad[t] teṣāṃ⁺ nīroddho evaṃ vādi mahā-śramaṇaḥ					
	諸法は	因（なる縁）によって	生ずる	因（なる縁）によって	滅する	pratītyasamutpāda ＝dharma-kāya
	（如来＝大なる沙門は）是の（＝諸法の）因（なる縁→縁起）を説く					
方便品の標文出世本懐偈		eka-kṛtyena eka-karaṇīyena mahā-kṛtyena mahā-karanī= yena＝eka-prayojanena				ekam ... yānam ārabhya sattvānāṃ dharmaṃ deśayāmi yad idaṃ buddha-yānaṃ
	tathāgato		loka utpadyate			
	如来（＝伽耶近成＝応身）は	一大事因縁を以ての故に	世に出現する			一仏乗を以ての故に衆生の為に法を説く
如来寿量品第16偈常住此処）					nirvāṇa-bhūmiṃ c'upadarśayāmi	na câpi nirvāmy ahu tasmi kāle ihâiva co dharmu prakāśayāmi= sadā sthitaḥ aparinirvṛtaḥ
				vinayârtha sattvāna vadāmi upāyam		
	如来（＝久遠実成＝報身）は			衆生を度せんが為の故に方便して	涅槃を現ず	而も実には滅度せず常に此に住して法を説く＝常住不滅
雪山無常偈	aniccā vata saṃkhārā		uppādā-vaya-dhammino, uppajjitvā nirujjhanti, teṣaṃ vūpasamo sukho' ti			
	諸行は無常なり		生じては		滅する	これが寂静は安楽なり
			――生と滅とを本質とする――			
方便品第68偈（行道）	imi sarva-dharmāḥ				nitya-nirvṛtā ādi-praśāntā	
			caryāṃ ... pūriya buddha-putro anāgate'dhvani jino bhaviṣyati			
	諸法は				常に滅度せるものであり	本より寂静である
			仏子は行を成じて			
				来世に作仏すべし		

生死一大事血脈鈔	妙法 依正（の因果） 一心の妙用 妙法蓮華経	（法は）生 生 生 有（道） 生 起	（妙は）死 死 死 無（道） 死 滅	（生死の二法が）十界の当体（蓮華） （因果又）蓮華の法 一心の妙用 本覚の真徳 妙法蓮華経 法性の
御義口伝	久遠実成の釈尊と皆成仏道の法華経と我等衆生との三ツ全ク差別無シト解て、妙法蓮華経と唱へ奉る処を、生死一大事の血脈とは云フ也			
化城喩品	無常	生 起	死 滅	（無常）常住、俱に 妙法蓮華経の全体なり の本有の体とは 南無妙法蓮華経なり 法性の
寿量品	一切衆生 凡夫の血肉の色身			の本有の在所は 南無妙法蓮華経なり を本有と悟るを本覚と云う
分別品	十界己己の当体の三毒煩悩			は妙法の功徳（＝本地無作の三身如来の寿）にして本有の南無妙法蓮華経なり
妙宗本尊略弁		生	滅（の仏に）	即して＝不生不滅常住（の仏体を見せしむ）

以上の図式によって、それぞれの論理の必然における、意趣の一致を見ることが出来よう。

すなわち法華経集成の基本構造（方便・寿量の二品の一対相依の関係）の根本原理（生滅即常住）は仏教思想の根本真理（である縁起法＝法身）である、と知られるのである。

十一、結論

かくして、法華経集成の（方便寿量の相依関係という）基本構造の（生滅即常住という）根本原理にして、仏教思想の根本真理でもある甚深の法（gambhīra-dharma）なる縁起（pratītyasamutpāda）の理法は、法華経と妙法と諸品との関係構造を簡潔に明示する**法華経原典分析総合解明図**[35]における、内的必然性を持続せしめる（構造上の）位置（position）と（機能上の）役割（responsibility）を確保している、といえよう。すなわち左の如くである。

- **縁起法頌**　ye *dharmā* hetu-*prabhavā* hetū teṣāṃ hy avada[t] teṣāṃ⁺ yo *nīroddho*⁺ evaṃ-vādi mahāśramaṇaḥ.（*Vinaya,* I, pp.40, 41）
- **雪山無常偈**　*aniccā* vata *saṅkhārā* uppāda-vaya-dhammino, uppajjitvā nirujjhanti, tesaṃ vūpasamo sukho 'ti,（*Dīgha-nikāya,* II, p.157）
- **方便品第68（行道）偈**　evaṃ ca bhāṣāmy ahu nitya-nirvṛtā, ādi-praśāntā imi *sarva-dharmāḥ*/ caryāṃ ca so pūriya buddha-putro, anāgate 'dhvāni jino bhaviṣyati//68//（*WT.*, p.45, l.12－l.15）
- **寿量品第３（常住此処）偈**　*nirvāṇa-bhūmiṃ c' upadarśayāmi* vinayârtha sattvāna *vadāmy upāyam*/ na câpi nirvāmy ahu tasmi kāle ihâiva co dharmu prakāśayāmi//3//（*WT.*, p.275, l.15－l.18）

二品一対相依関係

Saddharma-puṇḍarīka nāma dharma-paryāya = Mahā(-dharma = saddharma)-nirdeśa nāma dharma-paryāya

- Saṃdhā-bhāṣita (= ekayāna)-nirdeśa-dharma-paryāya
- Tathāgat' āyuṣ-pramāṇa (= saṃdhā-bhāṣya)-nirdeśa-dharma-paryāya

法華経と妙法の関係　（法華経原典分析総合解明図）

方便品第68(行道)偈　evaṃ ca bhāṣāmy ahu nitya-nirvṛtā, ādi-praśāntā imi sarva-dharmāḥ/caryāṃ ca so pūriya buddha-putro, anāgate 'dhvāni jino bhaviṣyati//68//

縁起法頌　ye dharmā hetu-*prabhavā* hetū teṣāṃ hy avada[t] teṣāṃ+ yo *nirodho*+ evaṃ-vādi mahā-śramaṇaḥ (*Vinaya*, I, pp. 40, 41)

雪山無常偈　*anicca* vata saṅkhārā uppāda-vaya-dhammino, uppajjitvā nirujjhanti, tesaṃ vūpasamo sukho'ti. (*Digha-nikāya*, II, p. 157)

analyic judgment
＋
synthetic judgment

Saddharma-puṇḍarika-sūtra
（妙法蓮華経）
‖
Saṃdhā-bhāṣya-nirdeśa
（随宜所説意趣の説示）

● tathāgat'āyuṣ-pramāṇa
‖
sadā sthita apari=nirvṛta（常住不滅）

▲ eka-yāna
（一乗）
‖
sarvajñatā-paryavasāna

■ saṃdhāya yam bhāṣitu
＝anusaṃdhi sūtrāṇa
＝sūtrāṇa...bhūtârtha

(-bhāṣya
‖
upāya-kauśalya
‖
triyāna-nirdeśa)

寿量品第3(常住此処)偈　*nirvāṇa-bhūmiṃ c'upadarśayami* vinayārtha sattvāna *vadamy upāyam*/na câpi nirvāmy ahu tasmi kāle ihāiva co dharmu prakāśayāmi//3//

・一定期間段階集成（＝収集・制作・編成）の構造機能根本原理
——妙法中最上如「白蓮華」（＝於「妙法中」最為「第一」）（＝十喩称揚＝釈名 niruk(ti)）

- 色(varṇa)なる修行法(pratipatti-dh.)＝自在神力(vṛṣabhitā),
- 香(gandha)なる証法(prāpti-dh.)＝秘要之蔵(rahasya),
- 味(rasa)なる教法(pravacana-dh.)＝甚深之事(gambhīra-sthāna)

を guṇa として具足する(sampanna すなわち所具として総持する)大良薬(mahā-bhaiṣajya)なる妙法(saddharma)＝所有之法(buddha-dharma).

縁起法(＝生滅の道理)頌(＝法身偈)に依る

▲方便品第2

●如来寿量品第16

■如来神力品第21

［妙法蓮華経］

序品第1	
譬喩品第3	方便
信解品第4	
薬草喩品第5	
授記品第6	
化城喩品第7	
五百弟子受記品第8	
授学無学人記品第9	
法師品第10	
見宝塔品第11	
提婆達多品第12	
勧持品第13	
安楽行品第14	
従地涌出品第15	如来寿量
分別功徳品第17	
随喜功徳品第18	
法師功徳品第19	
常不軽菩薩品第20	
如来神力品第21	如来神力
嘱累品第22	
薬王菩薩本事品第23	
妙音菩薩品第24	
観世音菩薩普門品第25	
陀羅尼品第26	
妙荘厳王本事品第27	
普賢菩薩勧発品第28	

注

（1）鈴木宗忠『基本大乗法華仏教』（昭34、明治書院）、拙著『法華経成立論史―法華経成立の基礎的研究―』（平19、平楽寺書店）一四一―一五八頁。

（2）拙著『法華菩薩道の基礎的研究』（平16、平楽寺書店）の第二篇の第一章　四　結論、第三章　八　大良薬たる妙法の三義と遣使還告、第四章　十・図ワ、第六章　五　結論。

（3）同、一〇九、一一五、一五二、一五四頁。

（4）拙著『法華経成立論史』一四四頁。

（5）同、一五四頁。

（6）拙著『法華菩薩道の基礎的研究』四四一頁。

（7）（8）拙著『法華経成立論史』一四四―一四五頁。

（9）塚本啓祥『法華経の成立と背景』（昭61、佼正出版社）、拙著『法華経成立論史』三三〇頁。

（10）塚本啓祥『インド仏教碑銘の研究Ⅱ』（平8、平楽寺書店）一五九頁。

（11）中村元『ゴータマ・ブッダ』（昭34、法蔵館）一四九―一五〇頁に左の如くある。

思想史的に非常に重要な一つの事件が起った。そのとき王舎城にサンジャヤ（Sañjaya）というバラモンが住んでいた。かれは二百五十人のバラモンのなかまをつれていたという。サーリプッタ（Sāriputta 舎利弗）とモッガラーナ（Moggallāna 目犍連）の二人はサンジャヤに従って修行していた。ときにサーリプッタはアッサジ（Assaji）・ビク（通常五ビクの一人と解せられている）が托鉢のため王舎城に入って来たそのすがたに打たれた。『誰を師としているのか？　誰の法を楽しんでいるのか？』とたずねたところ、アッサジは自分は釈尊の弟子であると答え、次の詩句を唱えたという。『諸法は因（なる縁）より生ずる。如来はその因（なる縁）を説きたもう。諸法の滅をもまた、大なる修行者はかくのごとく説きたもう』と。そこでサーリプッタは「法の眼」を開いたという。ついでモッガラーナも同様にアッサジ・ビクから教えられた。そこでサーリプッタとモッガラーナの二人はサンジャヤの弟子である二百五十人のバラモンを引きつれて釈尊のいます竹林に赴いて弟子となった。サンジャヤは痛憤したのであろう。「口から熱血を吐いた」という。

（12）織田得能『仏教大辞典』一三七頁に次の如くある。

縁起偈〔術語〕仏教の根本義なる四諦中、苦集滅の三諦を説きし偈文なり。中論偈中三諦を説くは智度論の文のみ其の他は苦滅の二諦なり　其中苦諦の因縁生に約して縁起偈と云ふ。又縁起法頌とも云ふ。又此法頌を以て塔基、塔内又は仏像の体内に安置すれば法身舎利偈とも法身偈とも云ふ。「ホフシンゲ」を見よ。〔寄帰伝四〕に「凡形像及以制底。

金銀鋼鉄泥漆瓦磚。或聚沙雪当作之時。中安二種舎利。一謂大師身骨。二謂縁起法頌。其頌曰。諸法従縁起。如来説是因。彼法因縁尽。是大沙門説。」と。〔金剛童子成就儀軌上〕に「又欲成就殊勝果者。於神通日月自分就趣河海側。印沙印泥為塔。中置縁起偈。」と。

(13) 同辞典一六〇八―九頁に次の如くある。

法身偈〔術語〕仏に生身法身の二種あり、随て舎利に二種あり、八石四斗の遺骨は生身の舎利なり、所説の妙法は法身の舎利なり。故に之を法身舎利偈、又は法頌舎利と云ひ、略して法身偈と云ふ。仏教の根本義たる四諦中の苦集滅の三諦を説きし偈頌なり。而て常には其の苦諦を説きし諸法従縁生の一句に約して縁生偈又は縁起偈と称するなり。〔智度論十八〕に蜆勒論中の所説を引て「仏於四諦中或説一諦或二或三。如馬星比丘為舎利弗説偈。諸法従縁生。是法縁及尽。我師大聖主。是我如是説。此偈但説三諦。当知道諦已在中。不相離故。」即ち諸法従縁生の一句は諸法の因縁生にして苦空無常無我なるを説く、苦諦の相なり。是法縁の三字は其の苦法を生ずる因縁の法を説く即ち集諦なり、尽の一字は苦集を滅するを説く滅諦なり。道諦は苦の集に於けるに例して知らるれば説かざるなり。〔智度論十一〕に「諸法因縁生。是法説因縁。是法因縁尽。大師如是言」と。其他の諸経論に説く偈頌は総じて生滅即ち苦滅の二諦なり。〔仏本行集経四十八〕に馬勝比丘舎利弗に対して説く頌に「諸法従因生。諸法従因滅。如是滅与生。沙門説如是。」、〔浴仏功徳経〕に「供養舎利有二種。一者身骨舎利。二者法頌舎利。即説頌曰。諸法従縁起。如来説是因。彼法因縁尽。是大沙門説。」、〔日照訳造塔功徳経、谷響集四〕等に出づ。又此偈明らかに法身の不生不滅を説くが故に法身偈と名くるなり。〔造像功徳経〕に「爾時世尊説是偈言。諸法因縁生。我説此因縁。因縁尽故滅。我作如是説。善男子。如是偈義名仏法身。汝当書写置彼塔内。何以故。一切因縁及所生法。性真寂故。是故我説名為法身。」、〔大日経疏六〕に「法従縁生即無自性。若無自性即是本来不生。因縁和合時亦無所起。因縁離散時亦無有滅。是故如浄虚空常不変易。」と。

(14) 雲井照善編『巴和小辞典』二七四頁。『織田仏教大辞典』八四九頁には次の如くある。

〔涅槃経十四〕に「諸行無常。是生滅法。生滅滅已。寂滅為楽。」之を諸行無常偈と名く。亦雪山偈と云ふ。此一偈は総仏法の大綱なれば各其の宗義に依つて所釈不同なり。今通途の一義を明かせば、諸の三世に遷流する有為法を諸行と名く。諸行は無常にして是れ生滅の法なり、此生滅の法は苦なり、此半偈は流転門なり。此生と滅とを滅し已て生なく滅なきを寂滅とす、

寂滅は即ち涅槃是れ楽なり。為し楽とは涅槃楽を受くと言ふにあらず、有為の苦に対して寂滅を楽と為すのみ。此半偈は**還滅門**なり。弘法大師のいろは歌は此四句偈を詠みしなり。いろはにほへどちりぬるを（諸行無常）わがよたれぞつねならむ（是生滅法）うゐのおくやまけふこえて（生滅已）あさきゆめみじゑひもせず（寂滅為楽）雪山童子は此中の後の半偈を聞く為めに身を羅刹に捨てしなり。◉（平家一）「祇園精舎の鐘の声諸行無常の響あり」、（曲、三井寺）「まづ初夜の鐘を撞く時は、諸行無常と響くなり。後夜の鐘を撞く時は、是生滅法と響くなり。晨朝の響きは生滅滅已、入相は寂滅為楽と響きて」。

(15) 拙著『法華菩薩道の基礎的研究』一一八頁。

(16) 同、第二篇の第二章・第三章で明証したところであり、すでに拙著『法華経成立論史—法華経成立の基礎的研究—』の§7和辻説の結語④、§16鈴木説の結語⑦⑧、§17横超説の結語⑨⑩に示したところである。

(17) 拙著『法華菩薩道の基礎的研究』一〇四、七二八頁。なお第二篇の第三章も往見されたい。

(18) 拙著『法華菩薩道の基礎的研究』二一六頁。

(19) 同、二一〇頁。

(20) 同、第五章、二一二—二一七頁、第六章、二一八—二三四頁。

(21) 拙著『華厳菩薩道の基礎的研究』六六七—七二四頁。

(22) 拙著『法華菩薩道の基礎的研究』一五二、七二六頁。

(23) *WT.*, p.36, l.17—p.37, l.25; *PK.*, 1866—1966. 正蔵、七ａｂ、六九ｂｃ。

(24) *WT.*, p.271, ll.14—16; *PK.*, 138a2. 正蔵、四一ｃ、一一三ｃ。

(25) *WT.*, p.275, ll.22—25; *PK.*, 140a5. 正蔵、四三ｂ、一一四ｃ。

(26) *WT.*, p.275, l.26—p.276, l.7; *PK.*, 140a6—7. 同前。

(27) 拙著『法華菩薩道の基礎的研究』、八二頁。

(28) 同、六九二—三頁。

(29) 同、一〇三頁。

(30) 昭和定本　五二二頁。

(31) 同、二七一八頁。

(32) 同、二七二二頁。

(33)『充合園全集』第三編、四一三頁。

(34) 拙記『祖書綱要講読記』（『法華学報』第十号所収）より着目されうる必要箇所を摘出すると、左の如し。

第十四　三世の顕本は最初を本と為すことの章

(2)『玄義』の毗盧遮那の一本は即ち今の妙法当体の蓮華なり

問ふ。『玄義』には「三世乃殊毗盧遮那一本不異」と云ふ、何為ぞ妙法蓮華一本不異の義を成ずる耶。（四石・389）

答ふ。『玄義』に毗盧遮那一本と云ふは、即ち上の文、「過去の最初に証する所の権実の法」を指すなり。

然るに「最初所証の権実の法」とは、即ち釈尊五百塵点劫の当初証得し玉ふ所の妙法当体の蓮華、向に已に弁ずるが如し。

矧んや復た『玄義』に「毗盧遮那一本不レ異」と云ふは、是れ本中の極本、妙中の深妙なり。故に上の文（『玄』の七の十二）に「本極法身微妙深遠 仏若不レ説 弥勒尚闇」と云ふ、是れ則ち「寿量品の観心の法体」[11]なり。

『授職灌頂口伝抄』（外の十八の二十二）に「寿量品の観心」を明して云く、「此の品の観心とは妙法一心の如来寿量品なるが故に我等凡夫の一心（△一念）なり。一心（△一念）は即（ち）如来久遠（の）本寿本地の無作の三身、本極法身の本因本果の如来なり。所居の土は常在霊山（なる）四土具足の本国土妙なり」と（已上）。四左・390

『観心本尊抄』（十六）に正に「寿量品の観心の法体」を示して云く、「今本時の娑婆世界は三災を離れ四劫を出たる常住の浄土なり。仏既に過去にも滅せず未来にも生ぜず、所化以て同体なり。此れ即ち己心の三千具足三種の世間なり」と（已上）。

此の文に「今本時の娑婆世界は三災を離れ四劫を出たる常住の浄土なり」と云ふは、『灌頂抄』に所謂る「所居の土は常在霊山四土具足の本国土妙」なり。

「仏既に過去にも滅せず未来にも生ぜず、所化以て同体なり」とは、『灌頂抄』に所謂る「本極法身（なる）本因本果の如来」なり。謂く、仏既に過去にも滅せず未来にも生ぜざれば、則ち無始の仏界にして、是れ本果なり。所化以て同体なれば、則ち無始の九界にして、是れ本因なり。

九界も無始の仏界に具し仏界も無始の九界に備りて依正不二・身土一体なり。故に結して「此れ即ち己心の三千具足三種の世間なり」と云ふ。五右・391

『惣勘文抄』（録内の十四の三十四帋）に本極法身仏の形貌を明して云く、「十方法界の正報の有情と十方法界の依報の国土と和合して、一体に三身即一・四土不二にして（本極）法身の一仏なり。十界を身と為るは法身なり、十界を心と為るは報身なり、十界を形と為るは応身なり。十界の外に仏無く仏の外に十界無くして、依正不二なり、身土不二なり。一仏の身体を以て寂光土と云ふ（此の下の五十五帋に云く、「三身と四土と和合して仏一体の徳なるを寂光仏と云ふ。寂光仏を以て円教の仏と為す。円教の仏を以て寤りの実仏と為す」と）。是の故に無相の極理とは云ふなり。生滅無常の相を離れたる故に、無相と云ひ、法性の淵底玄宗の極地なり。故に極理と云ふ」と（已上）。

明らけし。本極法身は即ち是れ無相の極理なり。

『本尊抄』に「今本時の娑婆世界は三災を離れ四劫を出たる常住の浄土なり」と云ふは、是れ無常の相を離れたり。

「仏既に過去にも滅せず未来にも生ぜず、所化以て同体な五左・392

り」と云ふは、是れ生滅の相を離れたり。

既に生滅無常の相を離れたれば、即ち是れ無相の極理なり。此の無相の極理、本来、十界三千の諸法を具足して因果俱時の不思議の法なり。故に名けて妙法蓮華と為す。

『当体義抄』（内の廿三の十四帋）に云く、「至理（に）名無し。聖人理を観じて万物に名を付ける時、因果俱時の不思議の一法有り。之れを名けて妙法蓮華と為す。此の妙法蓮華の一法に十界三千の諸法を具足して闕減無し。之れを修行する者は仏因仏果同時に之れを得」と（已上）。

明らかに知りぬ。本極法身の無相の極理、即ち是れ妙法当体の蓮華なり。

故に『本尊抄』（十七）に上の本極法身本因本果の如来を押へて、「此の本門の肝心、南無妙法蓮華経の五字に於ては、仏猶を文殊・薬王等に之れを付嘱し玉はず。何に況んや其の已下を乎。但だ地涌千界を召して八品を説いて之れを付嘱し玉ふ」等と云ふ。

故に知りぬ。玄文（＝『玄義』の文）の「毗盧遮那一本」は即今（＝即ち今）の妙法当体の蓮華なり。

釈尊五百塵点劫の最初に此の妙法当体の蓮華を証得して後、二番已来世世番番の寿量品に皆な此の本法を指して所顕の本と為す。今日の寿量品の如きは東方の五百塵点を能顕と為し以て最初所証の妙法当体蓮華仏を顕はす。若し過去の寿量品には東方を減じて譬と為して以て最初所証の妙法当体の蓮華仏を顕はす。未来永永の寿量品には或は四方を以て譬と為し或は十方を譬と為して最初所証の妙法当体の蓮華仏を顕はす。

当に知るべし。能顕の寿量品には三世久近の殊なり有り。而も所顕の本仏は是れ一仏（＝無始の古仏）にして異ならず。故に「三世乃殊（六右・393）毗盧遮那一本不レ異」と云ふ。

亦復た須く知るべし（六左・394）。其の法身と曰ひ真如と曰ひ実相と云ひ中道と云ふは、皆な是れ二番以降迹中の立名なり。其の本法の如きは只是れ妙法蓮華の名の外に体無く、体の外に名無し。所謂る名体宗用教の五重玄義の五字なり。

(3) 迹門には実相と名け本門には妙法蓮華経と云ふ

問ふ。妙法蓮華経は本門の法門なりとは、台家に於て亦た其の意、之れ有り乎。

答ふ。『諸法実相抄』（他受用の二の十二帋）に云く、「妙楽（△天台）の曰く、実相の深理、本有の妙法蓮華経なりと云云。此の釈の意は実相の名言は迹門に主づけ本有の妙法蓮華経と云ふは本門の上の法門なり。此の釈能く能く心中に案じさせ給へ」と（已上）。

『四条抄』（外の廿二の三十帋）・『日女抄』（外の廿三の十三帋）、亦た此の釈を引き玉ふ。未だ其の本文を考へず。

妙楽の『疏記』[12]（三の下の八十一）に経の諸法実相を結釈して云く、「今品の文に於ては是れ仏果が家の諸法実相なり。彼の譬説に於ては即ち道場に至るの荘厳の大車[13]なり。彼の宿世に於ては即ち極果の仏の開権の宝渚なり。彼の本門に於ては即ち久成の仏の所契の妙法なり。若し正宗、識る可くんば、豈に流通に迷はんや。一句一偈の言、弥々信ず可きなり」と（七右・395 已上）。

此の釈、分明に迹門には諸法実相と云ひ、本門には所契の妙法と云ふ。

故に知りぬ。諸法実相の名言は迹門に主づけ、本有の妙法蓮華経は本門の上の法門なるを（なり）。『玄義』（第一の五帋）に云く、「此妙法蓮華経者本地甚深之奥蔵也」と。『注法華経』の六（十四）は玄義略要内題[14]を引き玉ふ。往拝せよ。

11【寿量品の観心の法体】寿量品における能観の題目たる観心の対象となる所観の法体（＝妙法の当体）の意。更に以下に明示される。12【疏記】疏は『法華文句』、記はその記、すなわち『法華文句記』をいう。13【荘厳の大車】荘厳された大白牛車（＝一仏乗）をいう。14【玄義略要内題】『注法華経』の第六巻の十四帋には相当するものなし。第六巻の四帋には「玄義略要云。問。実相為レ体為レ性為レ修。答。迹門従レ性起レ修。以レ修証レ性為レ体。本門如来久証実相為レ体。故体云二妙法一（△体即妙法）。々々即実相。々々即通二迹本二門一也」（山中喜八編著『定本注法華経』四一六項）とある。『玄義略要』は智証大師円珍の述。天台の判教論を五時八教とするのに対して、三種教相を取る点に、特徴がある。

第十五　寿量の所顕は本覚の三身なることの章

(3)　本覚無作の三身を聞きて増進の益を得るの相

問ふ。迹門に於て一心三観を修めて始覚の三身を成ずるの人、本門寿量品に至りて、釈尊の本覚無作の三身を聞くの時、何ぞ（＝いかにして）増進の本覚無作の仏果に至ることを得る耶。

答ふ。**本極法身の一仏（は）十方法界[4]を以て身体（＝法身）と為し十方法界を心性（＝報身）と為し十方法界を相好（＝応身）と為す。**十界を身と為るは法身なり。十界を心と為るは報身なり。十界を形と為るは応身なり。十界の外に仏無く仏の外に十界無く依正不二[5]・身土一体[6]にして十方法界の依正、唯だ釈尊一仏の身体にして三身の徳用[7]（なる）を論ず。**法界に周徧して釈尊一仏の徳用なれば則ち一切法は皆な是れ妙覚の釈尊の三身の功徳なり。**寿量品に此の仏体を指して**我実成仏**と顕はす。

故に『御義口伝』（下の十）に云く、「我とは法界の衆生なり。（九左・400）十界の己己を指して我と云ふなり」等と（取意）。

又（四十三帋）云く、「本門の心は無作の三身を談ず。此の無

作の三身とは仏の上計にして之れを云はず。森羅の**万法を自受用身の自体顕照と談ずる**（『成仏用心抄』（外の廿五の十六帋）に云く、「境と云ふは万法の体を云ふ。智と云ふは自体顕照の姿を云ふなり」と。故に知りぬ。今の意は森羅**万法全体自受用身の智体を談ずるなり**）故に、迹門にして不変真如の理円を明す処を改めずして己が当体を無作の三身と沙汰するが本門事円の三千の意なり」と（已上）。

是れ則ち本門に至りて**森羅万法を釈尊の自受用本覚の智体（なり）と顕はす故に、我が身心即ち本覚の三身如来なりと信ずるの時**、「先に方便品の十如実相を聞きて（一心三観を修して初住の因位に居る）と謂ひしは、尚を是れ妄情なり」と知りて、速かに本覚無作の仏果を成ず。[8] 是れ本門増進の得益なり。

故に分別品の『御義』（下の五十六）に云く、「此の品は上の品の時、本地無作（十右・401）の三身如来の寿を聞く故に、今品にして上の無作の三身を信解する（なり。）其の功徳を分別するなり。功徳とは十界の己己の当体の三毒の煩悩を、此の品の時、其の儘妙法の功徳なりと分別するなり。其の功徳とは本有の南無妙法蓮華経是れなり」と（已上）。

当に知るべし。寿量品に十界の己己の当体を指して我実成仏の無作の三身、妙法当体蓮華仏なりと顕はす故に、我等が色心の当体即ち無作の三身、妙法蓮華なりと信解して、妙覚の極果に至るなり。

『惣勘文抄』（内の十四の三十一）に云く、「己心と心性と心体との三は己身の本覚の三身如来なり。是れを経に説いて云く、如是相（応身如来）・如是性（報身如来）・如是体（法身如来）、此れを三如是と云ふ。此の三如是の本覚の如来は十方法界を身体と為し、十方法界を心性と為し、十方法界を相好と為す。是の故に我が身は本覚三身如来（十左・402）の身体なり。法界に周偏して一仏の徳用なれば一切法は皆な是れ仏法なりと説き給ひし時、其の座席に列りし諸の四衆八部も畜生も外道等も一人も漏れず皆な悉く妄想の僻目僻思ひ、立所に散止して本覚の寤りに還って皆な仏道を成ず」と（已上）。

是れ即ち本門の本覚無作の三身を開いて、迹門始覚の仏因即ち本門本覚の仏果なりと知りて、増進の益を得たる時の悟にして、迹門当分の悟りには非ず。

故に下（五十帋）の文に云く、「但し今は迹門を開いて本門に摂して一妙法を成ず」と（已上）。

明らかに知りぬ。『総勘文』は本門顕はれ竟るの意に約す。迹門当分の悟りに非ず。

『授職灌頂抄』（外の十八の二十一）に本迹二門の教相を明して云く、「迹門は従因至果の十如十界の成仏、三周の声聞等是れなり。本門は此（十一右・403）の十如十界は従本垂迹、無作の十界は普賢

（△現）難思の行相なるべし。然れば則ち此の品の十如十界の悟りは本迹二門に通ぜしむるなり」と（已上）。十一右・403

前の従因至果の十如十界は迹門当分の悟り、後の従本垂迹の十如十界は本門跨節の悟り、即ち是れ本門増進の益相なり。

(4) 寿量品に正しく本覚無作の三身を顕説するの出処（あり）

問ふ。**当家の所立は本覚無作の三身、無始の古仏を顕はすを以て、本門寿量品の所詮の肝要と為ること、所引の祖判に分明なり。但し寿量品、何れの文にか正しく無始本覚三身如来を明す耶。**

答ふ。然善男子我実成仏已来無量無辺等の文なり。

『開目抄』（内の二の七帋）に云く、「一念三千（記者云う、＝本因本果＝無始の十界互具＝無始の古仏）の法門は但だ法華経の本門寿量品の文底に秘してしづめたまへり。龍樹・天親は知りて而もいまだひろめたまはず。但だ我が天台智者のみこれをいだけり」と。

次の文（二十三帋）に正しく**一念三千無始の古仏をば但だ本門寿量の文底に秘沈するの相**を明して云く、「弥勒菩薩、涌出品に四十余年の未見今見の大菩薩を、仏、爾して乃ち之れを教化して初めて道心を発さしむ等ととかせ給ひしを疑って云く、〔如来、太子為りし時、釈の宮を出でて伽耶城を去ること遠からず道場に坐して阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得下へり、是れより已来た始めて四十余年を過ぎたり、世尊、云何ぞ此の少時に於て大いに仏事を作し下へる〕等云云。教主釈尊、此等の疑を晴らさんがために寿量品を説かんとして、爾前迹門のきき（所聞）を挙げて云く、〔一切世間の天人及び阿修羅は皆な今の釈迦牟尼仏釈氏の宮を出でて伽耶城を去ること遠からず道場に坐して阿耨多羅三藐三菩提を得下へりと謂へり〕等云云。正しく此の疑を答へて云く、〔然るに善男子、我れ実に成仏してより已来た無量無辺百千万億那由他劫なり〕等云云。華厳乃至般若・大日経等は二乗作仏を隠すのみならず、久遠実成を説きかくさせ給へり。此等の経経に二つの失あり。一には行布を存する故に乃って未だ権を開せずとて、迹門の一念三千をかくせり。二には始成を言ふ故に尚未だ迹を発せずとて、本門の久遠をかくせり。此等の二つの大法は一代の綱骨、一切経の心髄なり。迹門方便品は一念三千・二乗作仏を説いて、爾前二種の失一つを脱れたり。しかりといへども、いまだ発迹顕本ぜざれば、まことの一念三千もあらはれず、二乗作仏もさだまらず、水中の月を見るがごとし、根なし草の波の上に浮べるにたり。本門にいたって始成正覚をやぶれば四教の果をやぶる。四教の果をやぶれば四教の因やぶれぬ。爾前迹門の十界の因果を打やぶ（破）て本門の十界をときあら（顕）はす、**此れ即ち本因本果の法門なり。九界も無始の仏界に具し、仏界も無**

十二左・404

十二右・405

十二左・406

始の九界に備はりて真の十界互具百界千如の一念三千なるべし。かく（△う）てかへりみれば、華厳経の台上十方、阿含経の小釈迦、方等・般若・金光明・阿弥陀経・大日経等の権仏（ごんぶつ）等は、此の寿量品の仏の天月の、しばらく影を大小の器に浮べ給ふ」等と（已上は『開目抄』）。

明らけし。寿量品の然善男子我実成仏已来等の文底に正しく一念三千の無始の古仏を顕はすことを。

『観心本尊抄』（十五帋）に云く、「寿量品に云く、然我実成仏已来無量無辺百千万億那由他劫等云云。我等が己心の釈尊は五百塵点、乃至所顕の三身にして、無始の古仏なり」と（已上）。

4【十方法界】十方の地獄ないし仏の十界をいう。　5【依正不二】依報（＝器世間）と正報（＝衆生世間）とが不二にして一体であること。　6【身土一体】身心と国土とが一体であること。　7【三身の徳用】三身即一にして常住なる本極法身一仏（＝釈尊）の功徳と作用。　8【森羅万法を釈尊自受用本覚の智体なりと顕はす故に、我が身心即ち本覚の如来なりと信ずる時、〜と知りて速かに本覚無作の仏果を成ず】この本門増進の得益は、四信の中、深信観成に相当するか。　9【行布】行は行列、布は配布。行布とは妙楽大師が各別の立場を列記して、相互の疎通を欠いている華厳の教理を批判して使用した用語である。

(11) 法身の非寿[44]と当家の本覚（の）顕本[45]との異

問ふ。妙楽（『記』の九本の三十一）の云く、「法身の非寿は諸教に常談す。但だ未だ曾て久成の遠寿を説かず」と。

然るに高祖、五百塵点の久成を以て破迹近情（＝迹の近情を破す）の一往と為して、本極法身の無始無終を以て真実の本と無し玉ふは、法華の沖微[46]を賤しみて還（かえ）って諸経の常談を貴ぶに似たり。如何ん。

答ふ。『開目抄』の上（廿五）に云く、「爾前のみならず、迹門十四品、一向に爾前に同ず。本門十四品も涌出・寿量の二品を除いては皆な始成を存せり。双林最後の大般涅槃経四十巻、其の外の法華前後の諸大乗経一字一句もなく法身の無始無終はとけども応身・報身の顕本はとかれず」と（已上）。（二十八右・437）

『観心本尊抄』（十六）に云く、「寿量品に云く、（乃至）所顕の三身（にして）無始の古仏」と（已上）。

『法華真言勝劣抄』（内の三十五の八帋）に云く、「又諸経には始成正覚の旨を談じて三身相即無始の古仏を顕はさず。（乃至）寿量品に此の旨を顕はす」と。又（十一）云く、「大日経並びに諸大乗経の無始無終は法身の無始無終なり。三身の無始無終には非ず」と（已上）。

当に知るべし。高祖は五百塵点久成の遠寿を以て能顕と為し、三身相即無始の古仏を以て所顕と為して、此の所顕の三身無始

の古仏を撮りて、以て諸経超過の大法（＝真浄大法 udāra dharma-paryāya＝本極法身）と為し玉ふなり。

(12) 経文は且く身・土を分ち（＝つも）仏意は身・土一体（にあり）

問ふ。経文には能依の身を説くには修成に約して我成仏已来五百塵点劫と説き、所依の土を説くには本有に約して我浄土不毀而衆見焼尽[47]と説く。高祖、何ぞ身・土俱に本有常住に約して、三千常住の旨を明し玉ふ耶。（二十八左・438）

答ふ。経文は始覚の近情を破せんが為に、且く修・性を以て身・土を分ち、能依の身に於て五百塵点劫の成仏を立つ。是れ則ち衆生無始より已来た謂ひ馴し夢中の心地なるが故に、夢中の心地に従って且く身・土を分かつ。而も意は本覚の寤の本心を訓ゆ。故に仏意は土（は）即（ち）是れ身なり。

『弘決』（一の上の六十五）に「迷情に従ふが故に依（報）・正（報）を分かつ。理智に従ふが故に、依（報）（は）即（ち）是れ正（報）なり」と云へるは、其の意なり。

当に知るべし。経文は始覚近情を破せんが為に、且く迷情に従って依・正を分かつ。高祖は当品の仏意を顕はさんが為に、依（＝依報＝土）即ち是れ正（＝正報＝身）なることを示し玉ふ。[48]

『惣勘文抄』（内の十四の三十四）に云く、「十界の外に仏無く、仏の外に十界無し。依正不二、身土不二なり。一仏の身体を以て寂光土と云ふ。是の故に無相の極理[49]と云ふなり」と。又（五十五番）云く、「三身と四土を和合して仏一体の徳なるを寂光仏と云ふ。寂光仏を以て円教の仏と為し、円教の仏を以て寤の実仏と為す」と（已上）。（二十九右・439）[50]

身土一体、其の義を知る可し。『記』の九本（五番）、『義例』（十七番）等、見合せよ。

44【法身（の）非寿】法身の無始無終のこと。法身は無始無終の理法であるから寿量の長短なかるべし、よって非寿という。三身常住（＝本極法身）に対する。　45【本覚顕本】本とは真実の本であり本極法身の無始無終をいう。本を証することを本覚という。本を顕わすを顕本という。本極法身とは三身相即無始の古仏（にして無終の新仏）、すなわち三身常住をいう。　46【沖微】遠く深く（＝沖）微妙なること。　47【我浄土…衆見焼云々】如来寿量品第十六の偈文なり。「我が浄土は毀れざるに而も衆は焼け尽きて憂怖諸の苦悩かくの如き悉く充満せりと見る」と訓む。

48【依・正】依は依報＝器世間で所依の土、正は正報＝衆生世間で能依の身（心）。　49【無相の極理】三身常住なる無始の古仏は、依・正の対相、身・土の対相なくして、依正不二・身土一体であり、一仏身体即常寂光土であるから、無相の極理（＝本極法身）である。　50【四土】凡聖

同居土（凡人と聖人が同居する土で穢土と浄土あり）、方便有余土（見思の煩悩を断ずるも塵沙・無明の煩悩未断のゆえに有余という）、実報無障礙土（中道の理を明証する菩薩の土なり）、常寂光土（常とは常住、寂とは解脱、光とは智慧、これを仏国土とする）をいう。

※記して云う。且立（しゃりゅう）は仮立（けりゅう）なり。『華厳五教章』の種性差別には仮立を用う。大乗始教に「五性各別説」有り。是を法爾・暫時・分位に分つ。法爾は因位として五性各別なるを云う。暫時は行位の上に、分位は果位の上に、それぞれ五性各別を仮りに立つるを云う。大乗終教は一切衆生悉有仏性をもって真実となすなり。頓教は唯一真如離言説相を名けて種性と為す。円教中同教一乗は諸教に明す性・習の二種性を摂し具足して主伴和合して宗を成ず。別教一乗は性習二種性は甚深にして因果無二なりと云う。

(35) 拙著『法華経成立論史―法華経成立の基礎的研究―』四〇九頁に示したものを修正したものである。